

2 1	西尾	東幡豆小学校	ハヤシ ヒロミチ 氏名 林 広 道
分科会番号	3	分科会名	社会科教育（小学校）

1 主題設定の理由

本学級の子どもたちは、1学期の社会科「縄文のむらから古墳のくにへ」の学習において、地図から校区近辺に残る古墳の数の多さに驚き、古代から豪族支配がなされた歴史ある地域であることを考察することができた。しかし、資料から問いを見いだして学習問題を立て、問題を追究したり、複数の資料から多面的に考察したりすることに苦手意識をもつ子どもも存在した。

このような実態を踏まえ、追究する問題を自分たちで考え、行動し、仲間と関わり合いながら問題解決に向かう実践に取り組むことで、さまざまな視点から社会的事象を捉える子どもの姿を願い、次のような研究テーマを設定した。

社会的な見方や考え方を働かせ、仲間とともによりよい社会づくりへの参画をめざす子の育成
—6年社会科「幡豆のお殿様 幡豆小笠原氏～戦国の世を生き抜いた決断の背景を考える～」の実践を通して—

2 研究の基本的な考え方

研究テーマを踏まえ、めざす子ども像、仮説と手だてを、次のように考えた。

【めざす子ども像】

- 1 社会的事象を多面的に追究できる子
- 2 仲間との関わりを通して、郷土への愛着を高め、よりよい社会をつくろうとする子

【仮説1】

子どもたちの興味・関心を生かし、自ら問題を見つけられるような教材の設定、及び単元構想の工夫をすれば、子どもたちは、社会的な見方や考え方を働かせ、多面的に追究することができるだろう。

【仮説1に対する手だて】

- ① 子どもたちに身近な教材として、地域に伝わる民話を単元の導入に取り入れる。
- ② 興味・関心を連続させる単元構想の工夫をし、子どもの思考の流れを明確にする。
- ③ 資料コーナーを設置し、さまざまな視点から社会的事象を捉えられるようにする。

【仮説2】

さまざまな「ひと・こと・もの」と関わりながら、仲間とともに考えを深め合う場の設定を工夫することで、子どもたちは、仲間との関わりを通して、意欲的に問題を追究し、達成感を味わったり、新たな問題を発見したりして、郷土への愛着を高め、よりよい社会をつくろうとするだろう。

【仮説 2 に対する手だて】

- ④ 仲間とともに考えを深め合う場の設定を工夫し、協働的な学びの場を生み出す。
- ⑤ 民話の舞台となった史跡の見学や文化財を目にする機会、ゲストティーチャーの話を聞く場を必要に応じて設定する。

3 研究の方法

研究単元の実践を通して、抽出児童 A の学びの変容を追い、仮説 1 及び仮説 2 の手だてについて検証していく。

(1) 児童 A について

児童 A は、物事に対してじっくり考え、学習のふり返りを書く活動で授業後に「書き加えてもいいですか」と申し出る姿が見られ、自分の思いや考えを表現したいという意欲を感じる。しかし、目の前の問題や物事に集中し過ぎて周りからの情報が入らなかつたり、自分の考えに自信がもてずに周りに関われなかつたりすることがある。問題にしっかり向き合い、自分なりの考えをもつことができる児童 A だからこそ、社会的事象を多面的に追究し、仲間との関わりを通して、よりよい社会をつくろうとする姿を期待したい。

(2) 研究単位について

研究単元の目標と学習過程は、次のようである。

【単元の目標】	
1 戦国の世の中の様子について、封建領主が領地の支配を維持するために、近隣情勢や他の領主との関係を踏まえて政治的判断をしていたことを理解する。	【知】
2 幡豆小笠原氏や時代背景、近隣情勢について、必要な資料を選択して読み取ったり、図書資料や見学、ゲストティーチャーへのインタビューを通して調べたりすることができる。	【技】
3 幡豆小笠原氏が幡豆の領地支配を継続させた背景について、資料を見て気付いたことや疑問について話し合い、時代背景、近隣領主との関係、当時の勢力図の視点から多面的に自らの考えを深め、根拠を基に表現している。	【思、判、表】
4 戦国時代の幡豆の様子や幡豆小笠原氏の学習について、教材からの気付きや疑問から学習問題を立てたり、学習をふり返ったりして、学習問題を追究し、その子なりの領主としての幡豆小笠原氏像を考えることができる。	【主】

【単元構想（18時間完了）】

出会う【第1時～第3時】 民話『安泰寺と家康』を読もう・・・1 戦国時代の民話を調べよう・・・2	手だて①：地域に伝わる民話から戦国時代の様子を読み取る
	手だて④：疑問や関心を話し合って学習問題を立てる
問題に取り組む【第4時～第16時】 寺部城跡と安泰寺を見学しよう・・・5 走り付けの戦いを調べよう・・・3 幡豆小笠原氏にとってどんな戦いだったのだろう・・・1 なぜ小笠原安元は徳川家康の家来になったのだろう・・・3 家来になった後、幡豆小笠原氏はどうなったのだろう・・・1	手だて⑤：史跡を見学し、ゲストティーチャーから話を聞く
	手だて③：資料コーナーを活用して個人追究する
	手だて④：仲間の考えと比べながら自分の考えを練り直す
	手だて④：仲間と学びを共有し、新たな問題を見いだす
	手だて③：資料コーナーを活用して個人追究する
	手だて⑤：必要に応じてゲストティーチャーに質問する
まとめる【第17時～第18時】 学習の振り返りをしよう・・・2	手だて④：学習問題に対する考えを話し合う
	手だて④：単元を通じた学びを話し合い、共有する

4 実践と考察

(1) 社会的な見方や考え方を働かせ、多面的に追究できるように【仮説1】

ア 本当になった【手だて①地域に伝わる民話】

本単元では、まず徳川家康の業績を学習した後、地域の民話を紹介する資料「はずの民話めぐり」を提示し、徳川家康が登場する民話『安泰寺と家康』を読んだ。児童Aは、資料1のふり返りを書いた。児童Aは、家康が天下統一を成し遂げると予言したと伝える民話の内容と史実を関連付けて記述している。また、資料2の児童Bのように、地域史と中央史の関連に驚きを覚え、史跡に実際に行ってみたいという内容のふり返りを書いた子どもが多数いた。このことから、地域の民話を教材に設定したことは、多くの子どもたちに教材に対する日常との関連性の高さを感じさせ、意欲的に学習に入ることにつながったと考える。

資料1「児童Aのふり返し」(第1時)

ぼくは、この民話を読んで清安公の(徳川家康が天下統一をするという)夢判断のことが本当になったからすごいと思いました。

資料2「児童Bのふり返し」(第1時)

家康が幡豆に来ていたことを今日知ったのですごいなと思いました。行ってみたいなと思いました。

イ 小笠原一族がすごい【手だて②子どもたちの興味・関心を生かした単元構想】

第1時で想定していた「幡豆で戦いがあったのかな」という疑問は見られなかった。そこで、子どもたちの追究意欲を連続させるために、戦国時代に関心をもった子どもの意見を取り上げ、戦国時代のイメージを質問した。子どもたちは、「武士」「鎧」「戦い」「大名」「家康」といった意見を述べた。「戦い」という意見から、徳川家康が幡豆の地を攻めたことを伝える民話『走り付けの戦い』とのつながりが見取れた。このことから、子どもたちに出会わせたい教材に子どもたち自身で出会うことが可能だと考えた。そこで、子どもたちの追究意欲をより高めるために、戦国時代の幡豆の歴史を伝える民話を調べる時間を設定した。すると、子どもたちは、民話資料の注釈まで熱心に読み込み、その他の民話にも興味をもった。児童Aは、ふり返りを資料3のように書き、自ら調べたことを基に、単元の追究問題に関わる幡豆小笠原氏の存在に出会い、興味・関心をもった。また、児童Aの「なぜ家康軍は…」という記述は、新たに抱いた疑問を追究していこうとする意識の芽生えであると言える。その後、子どもたちの疑問や関心を共有し、「徳川家康と戦った幡豆小笠原氏はどんな人たちだったのだろう」と全体で追究する問題が明確化した。

資料3「児童Aのふり返し」(第2時)

気になった民話は、『走り付けの戦い』です。東幡豆で徳川家康と(幡豆)小笠原一族が戦って、(幡豆)小笠原一族が徳川家康を退けたことや鉄砲を使った作戦がすごいと思いました。あと、なぜ家康軍は(幡豆小笠原氏の拠点だった)寺部城から少し離れた東幡豆の海に船をつけたのかなと思いました。

児童Aは、後述する手だて⑤の学習を通して、「なぜ小笠原安元は家康の家臣になったのか」と疑問を抱き、追究意欲を高めていった。子どもたちの興味・関心を生かした単元構想図を作成したことは、子どもの思考の流れを整理して取り上げるべき意見を明確にした。その結果、児童Aの学習過程のように、子どもたちが、自ら問題を見だし、問題に対する追究意欲の高まりにつながったと考える。

ウ うらにつづく【手だて③資料コーナー】

子どもたちが個人追究できるように、学校司書教諭や地域住民、市の文化財課学芸員の協力を得ながら、問題解決に迫れる図書資料や教師がまとめた資料を用意した。また、子どもたちが資料を選択し、多面的に問題を追究することができるように、「幡豆小笠原氏」「家康」「勢力図」「時代背景」などのテーマを掲示した資料コーナーを設置した。

児童Aは、幡豆小笠原氏の勢力拡大の視点から資料4の予想を立てた。この予想を基に、児童Aは、幡豆小笠原氏と家康の関係について、インターネットを使って個人追究した。しかし、用語の難しさや目的とする情報を見つけることに困り感を抱いている様子があり、この日のふり返りを資料5のように書いた。児童Aのふり返りは、調べたことを再度書いた内容だった。そこで、児童Aのノートに対して視点となる用語や年代に朱書きを入れ、「どんなことが知りたいのかな」「こんな資料もあるよ」と対話を行った。すると次時では、資料コーナーから資料「寺部城・小笠原安元」を自分で選択して活用し、個人追究を進める児童Aの姿があった。児童Aは、こ

この日のふり返りを資料6のように書いた。児童Aのふり返りは、「うらにつづく」とあり、ノート裏面まで使って書かれていた。児童Aのふり返りには、「今川軍」という他の近隣領主との関係の視点、社会的事象を時系列に述べた上で考察する視点、より追究したい内容など、これまでに見られなかった視点が書かれていた。児童Aは、次時で資料「幡豆小笠原氏について」を活用して個人追究を進め、ふり返りをノート裏面まで使って書いた。

子どもたちが追究できる資料を集めて精選し、種類分けを視覚化したテーマを掲示して資料コーナーを設置したことで、児童Aのように自分の考えを補強し、不足している視点を加えながら、多面的に考察することができたと考える。

(2) 仲間との関わりを通して、郷土への愛着を高め、よりよい社会をつくろうとするように【仮説2】

ア それもあるかもしれない【手だて④考えを深め合う場の設定を工夫】

自分の考えを見つめ直したり、考えを深め合ったりすることができるように、グループ学習、全体交流と段階を踏んで、互いに考えを伝え合う時間を設定した。グループ学習の段階では、子ども一人一人の考えを種類分けし、意図的なグループ分けを行った。資料の読み取りを苦手とする子どもが、仲間との意見交流を通して、社会的事象に対する見方や考え方に気付くことができるように、基本的に同じ種類の意見や関心をもつ子ども同士で組んだ。

資料4「児童Aの予想」(第8時)

(幡豆小笠原氏は)幡豆とその近くの海を支配していたが、そこだけだとそんなに広い土地ではないから三河を支配している家康と協力してもっと大きな力のもとへいった方がいいと思ったから。

資料5「児童Aの調べノートNo.1のふり返り」(第9時)

幡豆小笠原氏は、1562年頃から独立した家康に従うようになった。

資料6「児童Aの調べノートNo.2のふり返り」(第10時)

幡豆小笠原氏は、桶狭間の戦いで今川軍にいたからその時から敵対していたかは分からないけど、走り付けの戦いは(うらにつづく)桶狭間の戦いの4年後にあったから、次は走り付けの戦いと桶狭間の戦いに関係があったのかと走り付けの戦いの後にどうやって家康の家臣になっていたのかを調べたいです。

しかし、児童Aは、個人追究で幡豆小笠原氏と松平家との関係を基にした自分の考えをもっていった。そのため、児童Aのグループは、新たな見方や考え方に気付き、考えを深めることができるように異なる考えをもつ子どもを意図的に配置した。児童Aは、仲間に対して資料7のような自らの考えを述べ、仲間の意見に熱心に耳を傾ける姿があった。児童Aは、この日のふり返りを資料8のように書いた。仲間の意見をきっかけに、「それもあるかもしれない」と幡豆小笠原氏の置かれた状況について、当時の勢力図を関連付けて気付くことができた。児童Aは、協働的な学びによって、社会的事象である小笠原安元が家康の家臣になる決断をしたことがなぜ起こったか、その背景を新たな視点で考察し始めた。

イ 勝ったのに、なぜ？【手だて⑤ゲストティーチャーを必要に応じて設定】

3頁の資料2のような、導入時の子どもたちの意見から、民話の舞台となった史跡の見学を行った。子どもたちが目的意識をもって見学に臨めるように、見学で知りたいことを改めて調査した。児童Aは、「幡豆小笠原氏はどんなことをしたのか」「安元はどんな人だったのか」を知りたいと考えていた。児童Aのように、幡豆小笠原氏のことを詳しく知りたいという思いをもっている子どもが多数いた。この疑問は、予定する史跡の見学だけでは解決できないと考えた。また、子どもたちから幡豆小笠原氏について詳しい人に話を聞きたいという意見が出た。そこで、事前に子どもたちの疑問を基に打ち合わせを行った上で、見学時に市の文化財課学芸員をゲストティーチャーとして招き、話を聞く場を設定した。子どもたちは、学芸員の話に熱心に聞いていた。

児童Aは、この日のふり返りを資料9のように書いた。後日、児童Aにふり返りの内容を聞き取ったところ、「後から」とは、走り付けの戦いの後からという意味であった。また、驚いた理由を尋ねると、「走り付けの戦いを読むと、幡豆小笠原氏は家康軍を退けていました。幡豆小笠原氏は勝ったのに、なぜ家康の家臣になったのかなと思ったからです」と答えた。児童Aが、学芸員の話から得た知識と民話から得た知識を関連付けて考察していることが分かった。

見学後、学びを共有するために全体交流の場を設定した。児童Aは、自分が感じた驚きと疑問を仲間に伝えた。他の子どもたちからは、「たしかに」「ああ」といったつぶやきが出た。子どもの追究意欲を基に、ゲストティーチャーから話を聞く機会を必要に応じて設定したことで、意欲的に問題を追究して、新たな問題を見だし、仲間に伝えようとする姿につながった。

資料7「児童Aの考え」(第11時)

幡豆小笠原氏は、1563年ごろから松平康親に属して戦っていたのかもしれない。もしそうなら少し前から家康とすでにつながっていたのかもしれないから。

資料8「児童Aのグループ学習のふり返り」(第12時)

考えが似ている人と少し離れている人と話して、自分の考えと全然違った意見もあって楽しかったです。

1568年ごろに家康と今川家の勢力が似ていることが分かったし、違う意見で幡豆小笠原氏が家康の勢力に敵わないと思いき家康の家臣になったと思うという意見もあって、それもあるかもしれないと思いました。

資料9「児童Aのふり返り」(見学後)

幡豆小笠原氏が・・・後から家康の仲間になっていたことに驚きました。

ウ 前よりもっと楽しくて好きに【単元を終えた姿】

資料 10 「児童 A の全体交流の ふり返し」(第 15 時)

僕は、知らなかったことを知ることができて考えが深まりました。安元は、仲間だった今川氏、吉良氏を裏切ることになるから迷ったと思います。けれど、家康は今川氏を倒した信長と同盟を結んで勢力を伸ばしている、また戦うことになると思うから、土地を守るために家臣になる決断をしたことはすごいと思うし、よかった…。

資料 11 「児童 A のふり返し」(単元を終えて)

…僕が安元なら、家臣になったら今の領地を認めてくれるという条件だったとしても決断が全然できなかったと思います。…僕は、この学び方も楽しかったです。理由は、自分たちでいろいろな資料を見て自分の意見を発言したことも楽しかったし、資料だけだと分からないことをその場所に行ったり、学芸員さんに話を聞いたりしたからです。僕は、前も歴史が好きだったけど、前よりもっと楽しくて好きになりました。

児童 A の疑問を基に、「なぜ小笠原安元は、家康の家臣になったのだろう」という学習問題を立て、個人追究とグループ学習を経て全体交流を行った。児童 A は、ふり返しを資料 10 のように書いた。前頁の資料 7 の考えと比較して、児童 A は、小笠原安元が近隣情勢や他の領主との関係を踏まえて政治的判断をした意味や背景をより多面的に捉えている。

単元を終えて、児童 A は、単元を通したふり返しを資料 11 のように書いた。児童 A の「僕が安元なら…」という記述は、社会的事象を主体的に捉えて、領主としての小笠原安元像を考察している。そして、「この学び方も…」の部分からは、地域の「ひと・こと・もの」や仲間との関わりを通して、社会的事象を多面的に追究する学びのよさや達成感を実感した気持ちと歴史に対する関心の高まりが感じられる。

5 成果と今後の課題

【仮説 1 について】

地域に伝わる民話は、子どもたちに教材と日常との関連の高さを感じさせ、意欲的に学習に入ることができた。また、興味・関心を連続させる単元構想の工夫をしたり、追究を支える資料コーナーを設置したりしたことで、子どもたちが自ら「なぜだろう」と問題を見だし、子ども一人ひとりの意欲を大切にするとともに学びの質を保障することができ、社会的事象を主体的・多面的に追究しようとする姿につながったと考える。

【仮説 2 について】

考えを深め合う場の設定を工夫したことで、協働的な学びの中で、新たな見方や考え方に気付き、社会的事象をより多面的に捉えながら理解していこうとする姿が見られた。さらに、史跡見学やゲストティーチャーを必要に応じて設定するなど、地域の特色を生かし、地域社会と協働を図りながら追究したことは、主体的に学びを仲間に伝えようとする姿につながった。これは、地域や仲間との協働を通して問題の解決に取り組むことで、郷土への愛着を高め、よりよい社会をつくろうとする姿につながったと考える。

【今後の課題】

子どもたちそれぞれの個人追究の中で、戦国時代と現代の価値観の相違といった、子ども同士の意見交流で土台となるような社会科の知識の全てをおさえることができず、知識獲得のための時間を設定する必要性が生じた。単元の流れを切ることなく、習得すべき知識を獲得するための手だてを考える必要がある。